
+Quintapedo+

春風ななこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

+Quintapedo+

【Nコード】

N1813A

【作者名】

春風ななこ

【あらすじ】

主人公シルク少年とリーエムが、この題名である西国の魔女クインタペッドを倒しに行く。魔法と冒険のファンタジー小説。

＋プロローグ＋（前書き）

新連載です。このお話は、暗いところから始まるんで、まずは読んでみて下さい。

＋プロローグ＋

クインタペッド・・・あの忌々しい魔女の名をこの題名にしたのかと言えば、この世にあの悪女がいた事を忘れてほしくないからだ。

時は、ルネサンス時代。魔女裁判の真実を知っている人が少ない時代だ。『血が出ないのが魔女』

そう思われていた時代だ。魔女と聞いて、みんなはどんなのモノを想像するだろう？ほうきを使って飛ぶ？変身する？そんなのはあり得ないだろ？

魔女って言うのは、昔で言う医者役割や、まじないなんかで神官役も務めた。でも出来るのは、風をおこしたり、歯の痛みを直したり・・・。そんな物だ。ある日、病が流行り、人々は、魔女のせいにした。こんな呪ができるのは、あいつらしかない。町中の年を取った老婆や見習いの若い魔女などが、役所に呼ばれ、針や剣で刺される。その多くは、刃が引っ込むものや、年を取った人たちのこった筋肉には、血がとおっておらず、運が悪く、偶然そこに針が刺さったり・・・。これが、魔女裁判の真実だ。

私が、15歳のとき。

「師匠!!!」

私は泣きながら、町の広場を囲んでいる柵にしがみついた。

「殺せ!」

「早くやっちまいな!!!」

町の人達が、石を投げつけた。

「やめて・・・。」

私は力なくかすれた声で呟いた。ふと、少年が私の横から出てきて、恐ろしい目で石を何度も投げつけた。そして言った。

「母さんと父さんをかえせ!!! 魔女め! 死んじまえ!!!」

私は、少年を見た。少年も私を見た。

「なんで泣いてんだ？あ？」

「……………」

少年は、意味深に私をにらむと、背を向けて何処かへ行こうとした。

「待って……………」

人々が、ワッと、叫んだ。その声にかき消された。しかし、少年は、私の声を聞き取っていた。また私の方に、憎々しげに振り返ると、なんだよ。と、聞き返した。

「誤解……………」

また人々の叫び声にかき消された。師匠が、十字にかけられていた。その後方で、火が燃えており、傾いた十字架が、一本のロープで支えられていた。

「だから何だってんだ？」

私は、広場にいる、師匠の方を向いた。

「無視かよ。」

少年は、私の横に来た。人々が狂喜する中で、落ち着いた表情でゆっくりと歩いて出てきた町長が言った。

「みなさん。この町の悪鬼である魔女めを捕らえる事が出来た事を感謝する。」

また歓声上がる。

「ルーンスプール。本名、ドイルド・アビリスを、本日、9月23日に処刑。火あぶり。」

人々が、狂喜する。

「やめて。」

私が呟いた。

「やめれないよ、今更。」

ロープが切り離された。師匠は、一瞬、高い叫び声をあげた。私は泣きながら、少年は、震えながら顔を背けた。町の人々は、本当に嬉しそうに興奮しながら叫ぶ。

「師匠……………」

涙が次々にあふれてきた。

＋プロローグ＋（後書き）

V（^V^） Vこんにちは。春風ななこです。この他に、
『espionage＋1』も、同時に連載中です。ぜひ読んで下
さい。

前夜（前書き）

師匠ルーンズプール氏との最後の会話です。

前夜

「泣かないで。」

師匠は、冷たい手で私の涙を拭った。師匠が処刑される前夜。私は監視の目を盗んで、牢屋の前に来た。

「師匠。私、今なら師匠を助けられます。逃げましょう。」

師匠は首を縦に振らなかった。

「なんで……。」

私はまた目から涙をこぼした。

「あなたに遺言があるの。私が死ぬ前に……。」

「死んじゃうなんて言わないで下さい！！！！まだ、33歳ですよ！！？」

師匠は、私の手を握って首を横に振った。

「師匠は、100歳まで生きるの！白い森で、私以外にも、たくさんさんの弟子に囲まれて、シンベルミネの真っ白な花に囲まれて、手に色とりどりのルピナスの花が……。それが、それが師匠の最後なのよ！絶対！！」

私は、泣き崩れた。

「あなたは、真実を知っているはずよ。本当の悪鬼は、この町の二級神官クインタペッドだって言う事を。だからね。」

師匠も言葉をつまらせた。

「復讐はただの腹いせでしかないかもしれない。でも、これは、復讐じゃないわ。国のためよ。お願い。」

私は泣き続ける。

「この町に、シルク・ダーウィンと言う少年がいるわ。その子と共に、ドレアの都に言って。」

私は、返事をしなかった。

「魔法名のリーエムの名は語ってはいけない。本名のマチルダでとおしなさい。」

師匠はため息をついた。

「マチルダ。最後に笑って。」

私は力なく微笑んだ。もうどうする事もできないならば、最後に微笑んであげるくらいは……。師匠は、誰もが羨む美貌の待ち主。ブロンドの髪の毛。瞳は、ブルーで、光の当たりかたで、すみれや若草、バラの色に変わったりもする。子供が好きで、歌も上手。両親のいない私にとっては、母親の代わりだった。

「師匠。わたしは、師匠の遺言を果たすから、ずっと見守っていてね。」

師匠は、静かにうなずいた。

＋第1章＋シルク・ダーウィン

夜になった。広場には、私以外に誰もいなかった。柵もはずされて、広場の中央でまだ火が小さく燃えていた。私は立ち上がると、灰になった師匠の骨の所まで歩いた。頭の骨がたった一欠片だけ燃えていなかった。それを拾い上げるとハンカチに包んで、小箱に入れた。

「シルク・ダーウィンを探さなくちゃ。」

私は、家に帰ろうとした。誰もいない家に……。

「師匠。今までありがとう。」

私は泣くのをやめて、小走りで帰って行った。私の手に何かが当たった。涙？違う様だ。

「ついてないな。」

雨が降り出した。穀物倉庫の軒下で、しばらく休んでいると、眠たくなってきた。しばらくウトウトしていると、町に人が多々現れている事に気付いた。

「なんだろう？」

私が立ち上がると、町中の人騒いでいた。

「どうしたのかしら。傘も差さないで。」

「おい。」

声をかけられたので、横を見ると、今日会った少年がいた。

「どうしたのこの騒ぎ。」

「穀物倉庫の裏に回れば分かるさ。」

何か嫌な予感。

「傘に入れてやるから来いよ。」

「う、うん。ありがとう。」

少年の傘に入り、裏に回った。すると、キャンルスノーの森から煙が上がり、夜空がほんの少し紅くなっているのに気が付いた。

「あの場所って、家がある場所じゃ……。」

「そうさ。ルーンスプールの家だよ。あの魔女の家を焼き払っているのさ。俺もあそこまでやんなくても良いとは思っただけど……。」

「家が燃えてるの？」

「は？」

私の家が燃えている。師匠との思い出が、師匠でさえも燃えて、私は……私は……。

「おい、大丈夫か？ しっかりしろよ！」

「んっ。ん……。」

目が覚めたのは、少年の家だった。

「本当、大丈夫か？」

「ここは？」

「俺の家だ。」

私は起き上がった。自分がベッドの上にいるのが分かった。雨が降っている。

「そういえば、自己紹介がおくれてたな。」

「あ、いいです。私から言います。えっと……リっじゃなくて、マチルダ。私は、マチルダ・アルクって言うのよろしく。」

「おう。俺は、シルク・ダーウィンだ。」

ピンときた。心の中で、神と師匠に感謝した。

「本当に大丈夫か？ 顔色悪いぞ？ 家はどうした。」

さて、どう答えるべきか。この少年は、師匠に両親を殺されてたと思っている。

「どうした？」

「この事を聞いて、私を殺したければ、殺しなさい。」

私は、うつむいて言った。涙をあふれさせながら。一か八か。

「私の別名は、リーエム。ルーンスプールの弟子です。」

シルク少年は、しばらく黙ってしまった。それもそうだ。

「別に。」

「え？」

「別にお前さんを殺しやしないさ。弟子なんだし。」

何処か無理があるような・・・。そんな感じ。

「それからさ、今日広場で行った言葉、覚えてるか？」

「え？私が言った言葉？」

「そうだ。お前さ、『誤解』って言わなかった？」

誤解・・・確か言ったような。

「どういう意味なんだ？」

「それは・・・。」

それは、真実だ。私と死んで逝った多くの魔女達が知っている真実。

＋シルク・ダーウィン＋2（前書き）

今回は、真実を明かします。

＋シルク・ダーウィン＋2

真実だと思っていた事を嘘と言われたなら、簡単には信用してくれない物である。彼、シルク・ダーウィンに、真実を、本当は嘘なのだと言えば、信じてもらえるだろうか？そして、本当の真実を話せば、どんな反応をするだろう？

「だから、『誤解』って何だよ。」

「きつと、あなたに話しても、わかってもらえないと思う。」

シルクは、ため息をついた。

「物分かりが悪いつてか？」

「そんなんじゃ・・・無いけど・・・でも、信用してないでしょ。」

私は、顔色をうかがった。

「完全にはな。でもまだ事情を聞いてない。話終えるまでは、何も言わねえから。話せよ。」

「うん・・・じゃ、何にも言わないでよ。」

シルクはうなずいた。

「まず、師匠は、誰も殺したりなんかしてないわ。」

師匠の処刑の15日前・・・

師である、ルースプールは、私の他に、14人の弟子が居た。私よりみんな年上で、親や兄弟のいない私にとっては、姉や兄だった。今日も、師匠と買い物に行き、今夜の礼拝をした後、みんなでいつもの様に楽しい夕食を共にするはずだった。

「ただいま。みんな・・・。」

礼拝堂に帰ってきた私は、言葉を無くした。

「師匠・・・。」

「何？」

「ここ、本当に、礼拝堂ですか？ここ、本当に、現実・・・なんで

すか．．．．」

私は、駆け出して、一番可愛がってくれた、メル側の壁にかけ寄った。礼拝堂のベンチの下で、メルは、小さく震えてうずくまっていた。周りには、みんなの遺体と、おびただしい量の血が．．．。

「師匠！！まだ息があります！！」

師匠もかけ寄った。

「メル・モーリー、何があったか話せる？」

「さ．．．さいごく．．．西国の魔女です．．．西国の魔女が．．．

・『警告』を残しました．．．。」

私は、泣きながら、助かる見込みのないメルの傷口を、必死で押さえた。

「西国の魔女．．．！？クウィンタペッドね。」

「ええ．．．そうです．．．。し、師匠．．．。」

メルは、師匠の手を、力なく握った。そして、最後の力を振り絞ってこう言った。

「お願いです．．．リーエムだけは．．．。」

私が押さえている傷口から流れ出す血が、サーツと一気に冷たくなった。私は、涙を浮かべながら、メルを見た。目をつむり、私に微笑みかけていた．．．。師匠は、大きな扉の上方を見ていた。

「いやああああ！！メル、お願い！！目を開け．．．。て．．．．．」

泣叫んだ瞬間、扉が大きな音をたてて開き、町の役人と、警備隊が立っていた。

「助けて！！お願い！！」

私は、言葉を詰まらせた。

「ついに、弟子にまで．．．手を出したか。来い。汚れた魔女め。」

「はい。」

師匠が静かに立った。

どういう事．．．？

「ふん、いさぎが良いな。来い。お前を何らかの刑に処する！！！」

「ま．．．っ！待ってください師匠は！何にもして．．．。」
私は、走って師匠を止めようとしたが、身体が震えてうまく走れなかった。

「お前も気の毒だな。良い里親を捜しておく。」

役人がそう言った。次の瞬間、鼻先でドアが閉まった。どうして？
師匠は何もしてないのに。私は、また涙を目に浮かばせた。ふと、扉の上方に目が行った。

『警告 もし罪をかぶらなければ、町人は、皆殺しにして、焼き払う。』

あの時、どんなに、西国の魔女を恨んだ事か。本当は、クインタペッドの陰謀で、町の人々、私の兄や姉が殺されたんだ．．．。

＋シルク・ダーウィン＋2（後書き）

何かまた暗くなってしまうました。ごめんなさい！！

＋シルク・ダーウィン＋（前書き）

今回は、第1章の最終部分です。シルクが、ほんの少しだけ、リー
エムを信じます。

＋シルク・ダーウィン＋

それからだった。師匠の刑が、翌日には決まり、私の里親も遠くの町のルー・ナドと、言う人に決まり、この町の二級神官として、クウィンタペッドが迎え入れられた。

「この話、信じる？」

シルクは、ちょっと考えた。

「お前、なんの罪を師匠がかぶったか、知ってるか？」

「殺人って言う事以外何にも。」

シルクは、そんなこったろうと思った、と言った。

「俺の両親以外に、11人が殺されている。あわせて、13人の死者だ。お前の師匠の無罪を唱える奴も、6、7人程いる。お前がいった様に、殺されたのは買い物をしていた時刻だ。アリバイがある。が、しかし、神官じゃないとできない事がいくつかあるんだ。」

シルクは、信用しているのか、信用していないのかよく分からない。

「魔傷があるんだ。」

「マシヨウ？」

シルクは、うなづいた。

「呪われたり、火ではない、雷のような光線の痕。こんな事ができるのは……。」

「だから、師匠はやってないんだって！！師匠は、光線の魔法をそんなに上手に使える人じゃない！もし使えるなら、加減の調節ができる、クウィンタペッドに決まってるじゃない！！」

「でも証拠なんかは……。」

その時、いきなり雷が鳴り、家が揺れた。私は、シルクに旅の用意をする様にと言った。これは、どんなに鈍感な人にだってわかるはず。何かが違う。ただの雷じゃない。風がないのに、部屋の火が消えた。異常だ。早く……早く逃げなくちゃ！！

「なんだあれ……。」

シルクは、鞆を二つだし、私に食べ物と布とナイフの入ったものを渡した。シルクは、支度を急いでしながら、窓の外に目を奪われていた。

「あれは．．．。」

私も、目を疑った。雷が、竜巻きの様になっている。ゆっくりと町を壊してゆく。人々は逃げまどい、体力のない老人は、町の角に座り込んで祈りを捧げている。

「出来たぞ。行こう。この町に未練はないぜ。」

「そうね。」

私達は、階段を急いで下り、走って裏通りを駆け抜けた。私は、後を追いつながら、激しい頭痛と戦っていた。

「来い。リーエム。生き残り。死に損ない。お前が私を捜せば、私もおまえを捜している。真実を知るただ一人。」

「や．．．やだぜつたいに。私は．．．。」

「きやあああああああ！！！」

竜巻きの中から、けたたましい叫び声が聞こえた。

「くそつ。」

シルクも、同じ考えを持った様だ。助けたい。でも．．．。シルクが言った。

「助けたいのは、やまやまだけど、今行ったら．．．。」

「私も同じよ。助ける方法が一つだけあるの。」

シルクは私を見て、顔をしかめた。

「顔色が悪いぞ？で、助ける方法ってなんだ？」

「今、私に、クインタペッドが、話しかけて来ているから、私が、おとなしくクウィンタペッドに、身柄を引き渡したら多分、みんな助かると思う。」

シルクは、止まってくれなかった。ずっと私の手を引いたままだった。

「引き渡したりしたら、俺が、何もできなくなる。お願いだ。何所にも行くな。」

「そんな、そしたら、町の人は、どうなるの？」

私は止まった。

「来い！！」

「い、嫌よ。私のせいで、この町が……。」

シルクは、舌打ちして、私を持ち上げて、走り出した。

「この町に未練は無いって言って、うなづいたのは、何所のどいつだあ？」

「お願い、降ろして！！私のせいで、みんなが……みんなが……。」

私は、また泣き出した。

「めそめそ泣くな！！だいたい、お前がいなくなったら、この町に残された人々は、西国の魔女の支配下に置かれて、重税や兵役にまわされて、苦しむんだぞ？！」

「だからって、死んでしまったら……。」

「少しは黙れよ。まだ、誤解は完全に晴れているわけじゃないんだぞ！」

私は、言う通りに黙った。

「まだ、支配下に置かれていない町は、ここから一番近いところで、何所があるのか？」

「キャリバリー村。ここから、東に行けば、すぐ着く。まず、パンナコッタの河で、船に乗って。」

「分かった。」

シルクは、私を担いだまま走った。町を振り返る勇氣は無かった。炎の熱、人々の叫び声、クウィンタペッドの声、大雨、木々のざわめきや、倒れそうな強風。……雷の竜巻きが、光線を放ちながら、町を崩してゆく。……。

「どうか、お願いだから、ひとりでも多く生き残って。」

今出来る事は、願う事。ただ、それだけしかできなかった。

＋シルク・ダーウィン＋（後書き）

さて、やっとこさ、第1章が終わりました。次から、物語の冒険の始まり始まり！！

＋第2章＋笑うカボチャ邸（前書き）

今回は、敵か、味方か、謎の人物の登場。

十第2章十笑うカボチャ邸

私達は、パンナコッタの舟乗り場に来た。シルクは、私より身長が低いのに、とても力と体力があり、丈夫だった。

「ロープはずせ。」

私は、急いでロープを放した。OKの合図を出して、私も乗り込んだ。もう、クウィンタペッドの声も聞こえてこなかったが、相変わらず、霊的な力を感じ取っている自分の身体は、偏頭痛で私を苦しめた。

「どうしたんだ？ 顔が青いぞ？」

「な、なんでもないよ。」

私は、精いっぱい笑顔を見せたのだが、それがかえって泣き顔の様に見えた。シルクは、私に船を漕ぐ様に言った。そして、何やら、鞆の中を探し始めた。

「あった。これこれ。」

私は、シルクの手元を覗き込んだ。

「なあに？ それ。」

シルクの手には、古い小瓶のような物が握られていた。薄い月明かりでは、お互いの顔も見えない。岸の木々が、風に揺れる。

「実は、昨日、俺の家の前に、箱が送られて来たんだ。多分、お前の師匠からだ。」

「え！ なんて早く言ってくれないのよ！！！」

シルクは、小瓶を磨きながら言った。

「お前と、この箱と、一緒に送られて来た手紙に書いてある事と一緒にかどうか試したんだ。」

私は、船を漕ぎながら、少しシルクを睨んだ。

「多分、今、お前の魔力を嗅ぎとってクウィンタペッドが、追ってくる可能性と、お前が、クウィンタペッドの霊力や魔力の力のせいで偏頭痛をおこすかもしれないって言う配慮からか……。」

シルクは、小瓶を投げてよこした。

「薬だ。量は、分かってるだろうって書いてたぞ。」

私は、またまた、心が動いた。シルクは黙って船を漕ぐのを交代した。

「．．．．．師匠．．．．．あ、ありがとうございます．．．！」

もうすぐで日が昇る頃だろうか？月が、山の頭の上に居た。しかし、辺はまだまだ暗く、虫の声もしなかった。やっと、キャリバリ村に着いた。

「シルク。起きて。」

「．．う．．。」

私は、船を停めた。まだ眠たいシルクの手を引いて、村の前まで来た。

「あ。ねーちゃん、これ。」

「なに？」

シルクは、手紙を渡した。

「早く渡してよ！！」

それは、何となく予想が着いていたが、師匠からの手紙だった。

リーエムへ

多分あなたは、キャリバリ村へ行くでしょう？門番には、『笑うカボチャ邸』に用があると、

言いなさい。わかった？

そこに住んでいる、ルナ・フィンセントに真実を話しなさい。私の古くからの友人です。きつと、きつと、分かってくれるでしょう。

ああ、今あなたが、手紙を読んでいる時は、私は多分、あなたの側にいないのよね。困ったら、シ

ルクと助け合いなさい。きっと力になってくれるわ。だって、シルクの母親と私は、大親友だった

んだもの。殺したりしない。

本当のところ、親友を殺したクウィンタペッドが、死んでも、憎い。

最後に、言いたい事は、いつまでも、いつまでも、リーエム。あなたを愛しています。

ル師 より

ルースプー

私は、読み終わると、手紙をたたんだ。今度は、泣かなかった。師匠の意志を、また強く心に刻んだ。シルクと共に、キャリバリ村の門番のところに来た。

「誰だ。用件を言え。」

私は、門番の窓に顔を近付けた。

「マチルダ。隣の町から来ました。『笑うカボチャ邸』に、用があります。」

「よし。」

門番は、そう言うと、大きな門をあけた。私は、軽くお礼を言って、村の中へ入った。しかし、重要な事に気付いた。『笑うカボチャ邸』は、何所にあるの？

「今思ったんだけどよ。 . . . 。」

「私もだよ。」

シルクは、言いかけていたが、最後まで言わなくても、何が言いたいか分かった。

「どうすんだ？」

「いいから、少し歩こう。」

私は、シルクの手を引いた。道を真つすぐ行くと、噴水のある、小さな広場に来了。深夜だし、人はいるものの、酔っ払いばかりだった。

「どうすんのさあ。」

シルクが言った。すると、遠くの方から、馬車を引く音が聞こえて来た。

「黒い馬車．．．。」

姿を表した馬車は、馬も、車も、何故か大きかった。そして、車に乗っている人も、大きかった。馬車は、私達の前に止まると、扉を開けた。

「シルク・ダーウィン、リーエム。笑うカボチャ邸へ。」

「あ、ありがとうございます。」

馬車に乗ると、勝手に扉が閉まった。中は、深紅のいすがあった。

「ねむてえ。」

「がまんがまん。」

私は、シルクに言った。馬車の窓から、外の景色を見た。細い道だった。

しばらくして、『笑うカボチャ邸』に着いた。

「到着いたしました、どうぞ。」

大きな身長 of 召し使いは、私達が、馬車を降りるのを手伝った。この人は、人間なのかな？シルクと目配せした。カボチャ邸の周りには、畑があつて、黄色いカボチャが栽培されていた。入り口の明かりは、くり抜かれた、笑顔のカボチャだった。ドアが、また勝手に開いた。

「よくいらしたねえ。」

ルナ・フィンセントは、優しそうなおじいさんだった。

「ねーちゃん、俺、美人な姉ちゃんを期待してたぜ。」

「そ、そうね。」

確かに、びっくりした。女の人かとしてつきり．．．。

「この屋敷は、広いだけで、部屋もあまっている。」
私達を、階段へと案内した。

「どうぞ。この部屋です。」

二階へ上がって、一番端の部屋に案内してくれた。

「あ、あの．．．。」

「今日は、休みなさい。魔女よけのまじないは、してあるよ。それに、シルク。お前は、この部屋で良いかい？」

「え、ええ。一緒でかまいません。お前は？」

「うん、私も一緒でかまわないけど。」

フィンセントは、うなづいた。

「おやすみなさい。」

「お、おやすみなさい．．．？」

扉が閉まった。

「なんか、休めそうにないなあ。」

「そうね。」

私は、コートをハンガーにかけると、ベッドに飛び込んだ。

「親切そうなじいさんなんだけどなあ。何かひっかかるなあ。」

「私も同じよ。でも、師匠の友人だって．．．。」

シルクは、荷物をソファアにおいて、私のベッドに座った。

「そういえばさ、おまえ、何歳？」

「15。」

「そうか。俺は、13だ。」

私は、うつ伏せになった。

「ふーん．．．。」

私が、今日シルクとここ数時間一緒にいて分かった事は、年齢と、名前と、力持ちで、魔術的な勘が、ちよつとはあるって言う事が分かった。

「あのさ、もう一度、言うけど、あのじいさん、何かひっかからねえか？」

「そうね。明日には、逃げた方が良いかも。」

「だよな!!」

シルクは、荷物を整理し始めた。

「なんか、さっきまで寝てたからさ、目が覚めちゃった。見張つくからよ、お前、寝とけ。」

「うん。わかった。ありがとう。」

「おやすみ!」

シルクは、なんとなくかわいい少年だと分かった。 . . .

朝日で目が覚めた。扉の前に人が。ナイフを振り上げて、私の方に . . .

「きゃあああ!!」

私は、本当に目が覚めた。シルクは、見張つとくと言っても、やっぱり寝ていた。暖炉の上に、時計があった。午前9時。私は、ソファで寝ているシルクに、毛布をかけた。

「ノイローゼになっているのかしら?」

私は、頭を抱えながら、部屋を出た。すぐ隣に、洗面台があった。水を出して、顔を洗う。

「あ。タオルが無い。」

私は、濡れた顔を擦り、鏡を見た。後ろに、ナイフを持った人が!!

「きゃあああ!!」

「リー!!」

私の声に、飛び起きた、シルクが、ナイフを持った人を倒した。

「痛い。わたくしでございますよ。」

フィンセントだった。手に、ナイフなんか持っていなかった。

「じじい、何した?」

「わたくしは、なんにも。」

私の見間違いだっただのかしら? 多分そうだ。

「シ、シルク。ごめんね、私の見間違いだっただみたい。だから、心配しなくて良いわよ。」

「別に、心配してなんかしてないぜ。」

「それでは。下で、お食事を用意しております。」

フィンセントは、舌打ちして、この場を去った。

「お前さ、人がせっかく心配してやってるのに、なんで、何も言わないのか？」

やっぱり、心配してるんだ。（苦笑。）

「さっき、あの人が、後ろに立っていたから、びっくりしただけ。」

「本当か？ 今なら、信用できるのは、お前だけなんだから、信じてやるぞ？」

どうしよう。言うべきかな？

「．．．あの．．．あのひとが、ナイフを持って
いるみたいに見えて．．．。」

「はあ？ なんではやくいわねえんだ。」

「あ、あの、いやあ。ご．．．ごめんなさい！！！」

多分、シルクも思っただろう。

「あいつは、多分、クウィンタペッドの手下になってるんだろうな。」

「

「うん。黒魔術的なものがあるね。」

なんだか、気が合う。

「今日、ここを出よう。」

「そうね。」

私達は、この会話を、天井に張り付いていた、フィンセントに聞か
れていた事を、気付けなかった。

＋第2章＋笑うカボチャ邸（後書き）

おくれてごめんなさい！！>w<わたわた

毒蛇 毒薬（前書き）

今回は、シルクとリーエムが、ピンチ！！毒を盛られて動けない！
！どうなっちゃうのでしょうか？

毒蛇 毒薬

朝食を、さっさと食べ終えた。2階へ上がり、またまた、大急ぎで出かける準備をした。早く出なくちゃ。私達は、少ない荷物をまとめると、部屋を出ようとした。と、その時だった。

「きゃあああ！！」

また私は、声をあげた。シルクは、びっくりしながら、落ち着いて聞いた。

「どうした。」

私は、半分気を失いながら答えた。

「ど．．．ど．．．どくへ．．．どくへび．．．。」

「はあ?!」

シルクは、恐る恐る、ベッドのシーツをあげてみた。大きく口を開き、襲い掛かって来た蛇を、シルクは、避けて、頭を踏んだ。シルクは、顔をしかめた。蛇を踏んだ感じって、こんなんだっけ? なんだか、砂で出来ているみたいな感触。

「リーエム、大丈夫か? って、大丈夫じゃねえか。」

シルクは、蛇の死体を持ち上げて、私に聞いた。

「これは、本当に、蛇なのか?」

私は、もうろうとしながら死体を触ってみた。蛇を触った感じって、こんなんだっけ?

「わ、分からない。魔傷．．．じゃないか．．．見てくれない?」

「わかった。何所を噛まれたんだ?」

私は、傷を押さえている手をどけた。蛇に噛まれたなら、歯形の小さな傷で済むだろう? なんでこんなに血が出てるんだよ。シルクが、眩く。

「完全に、魔傷だな。」

「師匠の薬。」

私は、シルクに、薬を持ってくる様にと頼んだ。薬を受け取って飲

んだ。が、しかし．．．

「ううう。．．．」

私は、嘔吐してしまった。

「何で吐くんだよ．．．！！！」

私は、口をふきながら言った。

「ごめんなさい。多分．．．今日の．．．朝食．．．に．．．薬の効き目を．．．。」

「押さえる薬物が入ってたのか？」

私は、うなづいた。シルクは、舌打ちすると、私の足を縛り、自分の持っている解毒剤をくれた。それから、私を担いで荷物を持つと、急いで部屋を出た。

「おまえを担ぐのは、2回めだな。」

「そうね。ごめんね．．．．．ありがとう．．．。」

シルクは、階段を下りると立ち止まった。どうしたのかしら？と、思うと、そこには、フィンセント氏が立っていた。無気味な笑みを浮かべながら。

「もう立たれるのですか？」

「ああ。」

「お嬢様、どうなさったのですか？シルク様に抱えられて。」

シルクは、いら立ちを押さえきれず、どなった。

「黙れ！お前だろ？こいつを毒におかしたのは！！！」

「はて、なんのことやら。どうされたのです？見せて下さい。」

シルクの怒りは、頂点に達していた。

「触るな！！お前、クウィンタペッドの仲間なんだろ？白状しろよ！！リーエムに何の恨みがある！！！」

「はて．．．何故分かったのかなあ．．．。」

フィンセントは、無気味な、青い笑みを浮かべて、どんどん近づいてくる。

「シ．．．ルク．．．避けて．．．危ない．．．。」

私には、見えた。袖口から、毒針を出すのを．．．！！フィン

セントが、手をあげた！！その瞬間、毒針が、身体に突き刺さった！！！！

毒蛇 毒薬（後書き）

☆

いつも次回のお話が、遅れてごめんなさい！！このお話も、ずいぶん長旅になるみたい。。最後までお付き合いよろしくお願いします！！
「」ペコッ。

本物のフィンセント（前書き）

シルクが、リーエムを抱え、屋敷を出ようと試みた。しかし、そこには、怪しく微笑む姿が。

本物のフィンセント

床に、血が落ちた。私は、ほぼ気を失っていた。もうろうとして、目の前がよく見えない。毒が回っていた。シルクが刺された。私は、そうおもった。しかし、私とシルクとフィンセント以外の声がした。私達の後方からだった。目の前にいた、フィンセントが、「うう。」と、呻いて床に倒れた。床に落ちた血は、フィンセントの物だった。「ルナ・フィンセント……。」

床に倒れたフィンセントが言った。

「私の真似をして、私の親友の息子を、私の親友の弟子を、よくも。」

後ろに立っていたのは、男の人だった。若い人だった。でも、私は、意識がもうろうとしていて、思考回路が停止。よくわからない。

「吐け。クウインタペッドは何所だ？」

「わ、わたくしは……。」

床に倒れた、ニセモノの、フィンセントが呻いた。

「言いません。わたくしは、言いません。」

本物のフィンセントが、ニセモノの髪を掴んで、頭を何度か床に叩き付けた。シルクは、顔を背けた。痛々しい光景だった。

「言え。あいつは、何を考え、何所に居る。」

ドン、ドン、と、重々しい音が、ホールに響き渡った。古い館の床いたが、ギシギシときしんだ。私の、視界はどんどん暗くなって行った……。

「私は、ちょっと捕まっついてな。」

「そうなんですか。」

私は、目を覚ました。

「お。リーエム気付いたか。」

私は、シルクの隣に、師匠と同じ年くらいの男の人がいるのに気が

付いた。たぶん、これが本物のルナ・フィンセントだろう。結局男の人なのかと、思った。

「こちらは、本物のフィンセントさんだぜ。」
シルクが紹介した。

「結局綺麗なねえちゃんじゃなかったな。」

小声で、シルクが言った。私も、うなづいた。

「リーエムちゃん、もう安心して良いよ。解毒はしておいたから。」

私は、ルナ・フィンセントだ。よろしく。君の師匠と、シルクの母親と友人だったんだ。」

私は、声を出せなかった。ただ、うなづいて聞いていた。

「しばらく寝た方が良い。何か聞きたい事があるならその後だ。今は、解毒剤の副作用で物を言えないだろうから。」

私は、聞きたい事があった。私に効いた毒は、なんなのか。偽者のフィンセントは、クウインタペッドの何を知っていたのか。

私は、明け方に目が覚めた。体は、だいたい機能していた。シルクが、座ったまま寝ていた。私の手を握っていたようだ。

「シルク……。ありがとう。」

私は、シルクの体を倒し、毛布をかけた。めまいがした。

「ちょっと散歩に行こうかな。」

私は、ふらつきながら、部屋を出た。私が、階段を下りて、玄関のホールへ辿り着くと、勝手にドアが開いた。

「あ。おはよう。リーエムちゃん。散歩かい？」

「ええ。フィンセントさんは？」

フィンセントは、顔をしかめて言った。

「俺の偽者の死体処理だ。」

「は、ははは……。」

苦笑した。私は、聞きたい気持ちが入み上げてきたのが分かった。いろんな、知りたいことが、山より、海より、たっくさんあった。

「あの……。」

「ん？なんだい。」

私は、一番散りたいことを聞いた。

「師匠は、あなたに、何か伝言を残しましたか。」

本物のフィンセント(後書き)

(ハ、
―、
ハ、)
プツ

大きな書齋（前書き）

今回は、本が世界で一番好きなリーエムが、書齋にヒツキー（ひきこもり）状態になった。リーエムは、何故そこまで本を愛するのだろうか？

大きな書斎

私は、フィンセントを見た。目をしっかりと捕らえた。フィンセントのグリーンの瞳が、ふっと、微笑んだ。

「ドイルドからの伝言かい？」

「ええ。何か聞いていないかと。」

フィンセントは、優しく微笑んだ。

「おじょうさん。ここで話すのは、あまり思わしくないので、奥の部屋へ。」

「あ。はい。すみません。」

私は、フィンセントに連れられて、客間にやってきた。紅茶とクッキーがだされた。

「えー、伝言は、たくさんあるが、そのうち一つだけをお前に伝えてほしいと。」

フィンセントは、着ていた黒いローブを脱いだ。

「まず、来年行われる、『魔女の祭典』のときに、出し物をして、金賞を取れと。そのお金で、クウィンタペッドを捕まえる、資金にして、それから、えーと。泣くなど。めそめそするなど。」

途中で切れた感じで、伝言を終えた。

「それだけ。ですか？」

「うん。」

私は、首を傾げた。

「あの、名前しか知らないんです。『魔女の祭典』。いつ行われるんですか？」

「それはね、ハロウィンの十日前だよ。」

要点しか話さない人だな。師匠と一緒！

「あ、それとね、いろいろな国に、自由に入国できるように、祭典の時に、行われる、一級免許の試験を受けた方が良いよ。」

「はい。」

後は、雑談をして、シルクが目を覚ます頃には、朝食の仕度ができていた。

食後。私は、魔術書を置いている図書室へ案内してもらった。私の興味をそそる、様々な本があった。中には、私のお気に入りだった本もあり、医学書もたくさんあった。私の知らない病も、傷の治療方法も、何でも載っていたし、神官の心得を示した本もたくさんあった。神に対する話なども。

「ひどい火傷は、こうするのね。」

料理や、医薬品や、薬草を煎じるときに、私はよく火傷をするので、軽い火傷に対する治療方法も、何でも載っていた。一昔前の、魔術的な治療法も載っていた。

深夜になっても、私は、ずっとずっと勉強していた。シルクも、フインセントさんも、もう寝た方が良くと何度か書斎を見にきた。でも私は、断った。こんな図書室。こんな広い広い書斎。何時間あっても、読み足りない。今、やっと25冊目の本を読み終えた。

「ちょっと休もうかしら。」

私は、本を置くと、伸びをした。どの本も、500ページはあって、重たくてたまらなかった。休んでいると、そのままウトウトして、寝てしまった。

大きな書齋（後書き）

短い文章でごめんなさい！！！！！！！！

十第三章十魔女の祭典（前書き）

今回は、魔女の祭典へ向かうべく、馬車に揺られながら、出発します。ここの章では怖いものが出てくる予定なので、お楽しみに！

十第三章十魔女の祭典

それから、一週間ほど時が経った。私は、1級試験を受けるために、ずつと書斎にこもってばかりだった。今朝、突然フィンセントさんに言われて、『魔女の祭典』に向かう事になった。シルクは、私の分の荷物までさっさとまとめて、すぐに『笑うカボチャ亭』を後にした。

「何か空しいな。俺さ、もつとここにいたかった。」
私もうなづいた。

「最近、私、クウインタペッドの事を忘れてた。」
私は、呟くように言った。シルクは、ため息をついた。多分、私がここ数日部屋にこもっている間に、クウインタペッドの悪事は、どんどん広まっているのだろう。山道を、馬車が揺れながら、私達を、街へと誘った。

しばらくして、駅に着いた。ここで汽車に乗るのかと思えば、駅の横のとある商店で、私達にコートを買って、また動きだした。

「え？なんで？」
私は、コートを受け取ると、とてつもなく不思議に思った。

「まあ、後々役に立つんで。きにしない。」

フィンセントは、そういうと、街を出るために、大通りへと向かった。シルクは、ため息をついた。

「で、クウインタペッドの動きは、どうなの？」

私は、もう一度聞いた。シルクは、またため息をついた。

「そんなにたいした動きは見せてないけれど。色んな場所の、色々な町が……。クウインタペッドの 支配下に落ちた。こ

こ一週間では、3つの町が落ちた。」

「助かる見込みは？」

「なし。確実に落ちていってる。」

私は、ため息をついた。そして、窓から遙か遠くの空を眺めた。今、クウインタペッドは何をしているのだろうか？そして、今、何を見ているのだろうか・・・。

バンディッド・ロット（前書き）

短いお話ですが、今回は、とても重要！

バンディールダン・ロット

クウインタペッドの本拠地。ズイ帝皇国。ここは、国々の中で、最大の力を持っていた。しかし、今は、クウインタペッドの最大の力に押しつぶされていた。

「バンディ・ダン・ロット．．．」

クウインタペッドは、ある一人の少年を呼んだ。青年．．．？と呼んでもおかしくないであろう。まだ15歳なのに、とても落ち着き、大人びている少年だった。少年は、しっかりと頭を下げ、ピクリともしなかった。ただ、忠実に、クウインタペッドの事を思っていた。

「お呼びでしょうか。女帝皇様。」

暗い、灰色の部屋に、閉ざされた窓。ただ燃える、小さなろうそく。大きく、大きく、広い、広いこの冷たい部屋に、声が響く。

「ああ。」

クウインタペッドの小さな声でさえも、この大きく、広く、冷たい部屋には、響き渡り、ろうそくの炎が揺れる。

「シルク・ダーウィン、リーエム。捕まえろ。殺すな。持ち帰れ。」

「．．．はっ．．．」

返事をして、しばらくすると、勝手に戸が開いた。わずかな光が、深紅のじゅうたんを照らした。少年は、立ち上がった。そして、静かに部屋を出ていった。

．．．．．私が、最初に言った様に、魔法は、空を飛んだり、猫に姿を変えたり、死人を生き返らせたりなんかしない．．．！でも、本当に、クウインタペッドだけは、絶対に違う。

真の魔術師だ。

本当に、神に頼らなくとも、天候を変えた。

本当に、一晩で、一国を焼き落とした。

本当に、私達を、出来る範囲で追い続ける事が出来る。

私は、これほどにまで、みんなが想像していた様な、『魔法』を使えるのだ。呪だって、いつでも出来る。呪文だって、正確に発音できる。私は、クウインタペッドに憧れた。

でも、クウインタペッドは、人殺しだ。なぜ、巨大な力を持っているのか。なぜ、クウインタペッドは、『愛する』事ができないのか。...

少年は、魔女の祭典へと向かった。黒馬にまたがり、何日間も、飲まず食わず出走り続けた。やっと峠を越えて、少年は、湖に立ち止まった。馬にも十分な水を飲ませた。クウインタペッドのまじないがかかった馬とは言え、さすがに疲れていた。3日ぶりの草と水を口にし、少年は、約8日ぶりの食べ物と水を飲んだ。

バンディッド・ロット（後書き）

お待たせいたしました。久しぶりに執筆です。

今回のお話の、重要になってくるキーワードは、

『愛する』事ができない。

です。後に、重要になってゆきますので、お楽しみに！！

ウ、オイス（前書き）

今回は、敵の少年が、間接的にリーエムを攻撃します。やっとひと休みできると思ったのもつかの間。。こんなことになるなんて。。

ウ、オイス

私達は、途中の町で泊まった。ここの街には、高い山があった。

この山にある駅から、魔女の祭典の行なわれる場所まで運ばれるようだ。フィンセントは今日は一日休もうと、言った。予定より大幅に遅れた。もう、7日は経ってしまった。天候がここ数日悪天候が続くので、魔女の祭典も、数日遅らせたようだ。

「いらっしやい旦那。」

宿の店主が気の良い挨拶をした。

「3人用の部屋だ。それと、馬車を停めるところはあるかい？」

「へい。お部屋は、一番上の階が空いてやす。馬車は、裏口のはしっここのところに停めておいてくだせい。馬は、馬小屋にお運びいたしやす。」

「ありがとう。」

フィンセントは、名簿に名前を書いた。そして、部屋の鍵を受け取ると、すぐに階段を上った。私は、名簿に書いた名前がフィンセントでは無い事に気が付いた。多分、クウインタペッドの存在を氣にしたのだろう。

「この部屋か。」

小さな部屋だった。ちゃんとマッチがあって、暖炉に火をつける事が出来た。ベッドが4つ。テーブルが1つ。ソファアが2脚。

「やっと安心できる。」

シルクは、そう呟いた。ベッドに横になった瞬間にいびきをかき出した。相当疲れていたようだ。フィンセントが、上着をぬと靴を脱がせて毛布をかけてやった。外は、大雨が降っていた。雷鳴が鳴り響いていた。私は、雷が好きだった。静かな夜空に、龍みたいな鳴き声で鳴り響く。私は、雷が嫌いになってしまった。あの夜を忘れられない。つい数日前の事だからかもしれないが、この音が聞こえる度に、私の町が赤く燃え上がり、雷の竜巻きが、みんなを巻き込

み、血を撒いたあの光景が、くつきりと、鮮明に見えるのだ。

「リーエム？リーエム？」

私は、我に帰った。フィンセントが、不思議そうな顔で見ていた。

「どうしたんだ？気分でも悪いのか？」

「・・・いいえ、大丈夫。気にしないで。」

私は、精一杯の笑顔を作ったのだが、強張って、泣き顔の様な顔に近い。

「何か暖かい飲み物でも買ってくる。何が良いかい？」

「あ。えっと。チョコレートドリンクがあつたら。」

「高価な物を頼みたがるね。」

フィンセントは、部屋を出ていった。急に沈黙した。シルクのいびきが大きく聞こえる。私は、冷えたてを暖めるために、暖炉に近寄った。私は、目をつぶった。炎を見ると、また思い出すからだ。でも、目をつぶってもまた、いやもつともつと鮮明に光景が浮かんできた。

「あー。なんか、やだな。」

私は、気を紛らわすために歌った。

いつまでも見つめてても

この青い晴れた空は描けそうにない

世界と明日どちらが壊れてしまうと言うのなら

わたしは やり残した事が無いのか

考えてしまうでしょう

私一人で持ちきれない事ならば

あなたも一緒にいてくれるでしょう

いつまでもみおろしても

この花の種は早くは芽生えてくれそうにない

あなたとわたしどちらかが消えてしまおうと言うのなら

わたしは きつとあなたを守ろうと

自分が消えてしまおうでしょう

貴方一人で居れないと言うのなら

あなたも一緒に消えてしまいましょう

いつか星くづが落ちるなら

私達で集めましょう

そして．．．．．

私の目から涙があふれてきた。寂しい歌を歌うと、とてつもなく空しくなってきた。私は、ソファアに深く座り直した。階段を上ってくる音がする。フィンセントだろう。私は、もっと深くソファアに深くめり込んだ。メリツ．．．メリメリツ．．．。気が付くと、何故かソファアから手がのびていた。そして、私を掴んでいた。

「離れろ！」

ドアを開けたフィンセントが、剣を抜いて私に向けていた。いくつもの手が私を掴んでいた。

「痛．．．っ．．．。」

ソファアの布が突き破り、私を押さえ込んでいる。

「a z a k a r, r i k a - n a, n o r n n o. . . .」

私は、なるべく魔物払いを唱えた。

「リーエム、たえろ．．．！！！」

フィンセントがすかさずお札を書いた。そしてソファアを囲む。しかし、縄のようにつながったお札の何処からか、火がついた。

「くっそ。誰の仕業だ！！！」

「大丈夫よ。私は。まだ、まじないを跳ね返せる。でも、シルクは．．．？」

フィンセントは後ろを振り返った。シルクは無事なようだ。

「大丈夫みたいだ。でも、何故．．．？」

「私がお札をこっそりつけたの。それよりこれ．．．なんとか．．．」

・。
痛みが走った。頭の中にだ。声が、声が聞こえる。・。
「嫌な妖気がただよってる。リーエム、保てるか？いま、シルクのベッドが危ない！」

「え．．．ええ、なんとか．．．．．。」

私は、必死に逆のまじないを唱える。シルクのベッドがきしむ。フィンセントは、すみやかに避難させた。そして、陣を書いて、私のソファアを囲んで手を離そうとするが、近付く事も困難だった。

「に．．．人間じゃない．．．どうなってるのよ。」
「くっそ。」

。声がはっきりと聞こえはじめた。意識を持たなきゃ。でも．．．。

「リーエム、しっかりしろ！」

フィンセントは、魔術書をひらいた。シルクが目を覚ます。彼も知らだがりびれている。

「あ。ああ．．．いや．．．。」

「しっかりしろ！意志を持つんだ！！aohqao hqpuyan
arefu.reshy.gimeru.daresu.hey.
・。
」

私の足を押さえている手の一本が、力を弱めた。でも、声はやまなかった。呪の言葉をずっとかけ続けている音、声、人々の悲鳴が聞こえる。

「リー．．．エム．．．。待ってろ。今助ける。」

シルクが立ち上がろうとした。しかし、フィンセントが、その行動をとめた。

「やめろ。何も力にならない。」

「．．．．うっ．．．．そうよ。いまは、このまじないをなんとか．．．。」

気を失いつつ、私は、シルクに話し掛けた。

「．．．．リーエム、コチラへ来イ．．．．．。」

はつきりと呪文の中で、この言葉が聞こえた。私は、激しく抵抗した。だめだ。ここで気を失ったりしたら．．！

「アレフ、レシュ、シン、タウ、WHEET OF FORTUNE．．。」

私は、必死で唱える。でも、やはり、このウゝォイスは頭から離れなかった．．。

黒騎士（前書き）

今回は、ピンチ！！！！どうなる？クウインタペッドの使者が迫る。
逃れられない！！！！

黒騎士

風もないのに火が消えた。声が大きくなった。私にしか聞こえない声ではなくなった。シルクにも、フィンセントにも、はっきりと聞こえた。そして、ごちゃごちゃとした声の中に、はっきりと、誰かが居た。

．．．来イ、コチラへ。リーエム。シルク・ダーウィン．．．

フィンセントは、ろうそくをともした。しかし、少し揺れたかと思うと、また消えた。雷の光で、部屋が時々、はっきりと目に映った。そして、次の瞬間、ろうそくが一気についた。すると、私を押さえていた、何本もの手が、消えていた．．．

「大丈夫か!？」

フィンセントが駆け寄った。私には、まだ、あの声が聞こえている。火がついたからだろうか? もう、フィンセントや、シルクには聞こえなくなっていた様なのだ。

「おい、さっきの声、聞いたか? なんか変だぞ。」

「ああ、多分、クウィンタペッドの手下だろうよ。其処まで強い魔力じゃない。」

「わ、私には、まだ、まだ聞こえてる。」

私は、からだを支えているフィンセントに訴えかけた。確かに、声が近付いてくる。今度は、頭の中や、心の中じゃない。肉声が近付いてくるのも分かった。私には、この声が、頭の中であるほど、肉声が、窓の外で雨音や雷鳴と共に、聞こえる。

「．．．来る。逃げなきゃ．．．」

「えっ?」

フィンセントが、聞き返した瞬間だった。1階の広間で、宿泊や、食事をしていた客達の悲鳴が上がった。そして、馬が鳴いている。

「このがきめ!!」

誰かが、その、私達の頭の中に入ってくる声の主に襲い掛かる。

「うわあああああああああああ!!!!!!!!!!!!!!」

大きな声が上がリ、また、悲鳴が上がる。

「きゃあ!!」

「やめて、この子だけは、この子だけ。 . . 。」

小さな子供が泣叫ぶ。そして、一瞬で、鳴き声が途切れた。ゴロンと、床に、重々しい音がする。たくさんの客達が、応戦する。

「来た。」

「逃げるぞ。」

フィンセントは、私を担ぎシルクの手を引き、下の階に降りた。3階。その廊下の窓から、一気に飛び下りた。見事に積み上げられたわらがクッションになったが、わらに埋もれてしまい、脱出するのに、かなり苦勞した。やっと地面におりると、馬小屋へ行った。早くどれでも良いから、馬に乗らなければ。しかし。 . . 。馬小屋は、とても静かで、血が飛び散っていた。見事に首筋をやられ、どの馬も、使い物にならなかった。 . . 。

「くそ。馬なんて、当てにするんじゃないかった。」

フィンセントは、舌打ちした。

「シルク、少しは動けるか？動けるなら、手伝え。」

「ああ。大丈夫だ。」

馬のいない馬車の戻ってきた。なんと、フィンセントは、何かあった時のためにと、手動のからくりを施していた。これで、なんとか動かした。フィンセントは、馬のいるべき位置に自分が乗り、車をこいだ。自転車みたいにつくりだ。

「くっそ。重たい。」

「がんばれ、おっさん。逃げなきゃ、俺達。殺されるぞ。」

シルクが、車を引っ張る。私は、頭の中の声が、追ってくるのを感じた。

. . . 何処だ。何処ニイルンダ. . . 。出テコイ. . .

. 才前タチハ、何処ノ部屋ニ、居ル. . . 。

早く、宿屋から離れたかった。なかなか、この車は、進まなかった。もし、あの街角を曲がる前に、宿屋の最上階、4階の位置からこちらを見たとしたら、確実に、追ってくる出あろう。

「お願い、神様……！！！」

しかし、神には、願いが届かなかった。あの厚い雲のせいだろうか。願いは、天には届かなかった。

・ ・ ・ 見ツケタ。馬車。

私は、窓から、宿屋を見た。私達の泊まっていた部屋から、黒騎士が、こっちを見ている。私は、しびれた身体を奮い立たせて、外に出た。

「見つかったわ！！！逃げましょう！！！」

「しかし、車は置いていけないんだ。」

フィンセントが言った。

「なんでよ！？命と、車、どっちが大事なのよ！！！」

フィンセントは、馬車の裏に回って、シルクに、馬車を漕がせた。

そして、馬車を押しながら、

「そりゃ、命さ。でもな、この中には、大事な物が入ってるんだ。」

「何言ってるんですか！！！」

私も馬車を押した。重たい馬車だった。雨で霞んで見えない道を振り返った。敵が追い掛けてこない。すると、前方で声がした。

「お前は、シルク・ダーウィンか？」

シルクが危ない！！私とフィンセントは、馬車の前に行った。そこには、地獄の使者でもあるかのように、よごれた兜をかぶった、黒騎士が居た。もう、逃げ場がない。

「もう一度、問う。お前は、シルク・ダーウィンか？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1813a/>

+Quintapedo+

2010年10月14日17時18分発行